

水田の濁水削減／「一滴を変える」農家の努力

谷口吉光（秋田県立大学）

八郎湖が湖沼法の指定を受けてから1年、水質改善や環境再生のための新しい取り組みが流域のあちこちで始まった。そのなかでも画期的なのは、水田の濁水（だくすい）削減の新しい取り組みが八郎湖内外で始まったことだ。

八郎湖の水質改善と田んぼの濁り水。何のことかわからない人も多いだろう。八郎湖の水質問題は「富栄養化」という言葉が示すように、窒素やリンなどの栄養分が湖水中に増えすぎたことによる。だから、八郎湖の水質改善のためには湖に流れ込む栄養分を減らす必要がある。

それでは、八郎湖の栄養分はどこから来るのか。実は水田が圧倒的に多い。水田に使う肥料や水田の泥が代かきや田植えの時に水に溶けて排水路に入り、最後には八郎湖に流れ込んでくるのだ。県によると、八郎湖の栄養分の40～60%が水田から来ているという。

ちなみに水田といっても大潟村だけではない。八郎湖周辺にある水田の影響も大きい。大潟村と周辺地域の水田面積はだいたい同じ、栄養分の流入量もだいたい同じである。だから水田濁水の責任が大潟村だけにあるというのは間違いで、周辺の稲作農家も同じくらいの責任を背負っているのだ。

こうした事情を背景に、秋田県は昨年からは八郎湖流域の全農家を対象に、「浅水代かき」や「落水管理」の取り組みを呼びかけている。「浅水代かき」は少ない水で代かきをすることで、「落水管理」は田植え前に水田の水を落とす時に、水量を減らしたり水の勢いを殺したりすることだ。どちらも濁水を減らすのに効果的で、かつ農家が取り組みやすい方法と言われている。

実は、周辺地域の農家が地域全体で濁水防止に取り組むのは初めてのことである。意識改革にはまだ時間がかかるだろうが、着実な広がりを期待したい。

一方、大潟村では昨年からは「大潟村環境創造型農業支援基金」の取り組みが始まった。これは無代かき栽培や有機栽培などに取り組む農家に10a当たり500円から2000円の直接支払いを行うという村独自の制度である。

金額は必ずしも十分とは言えないが、環境に配慮した農法に取り組む農家に経済的動機づけを与える意味で画期的な制度だと思う。実際、昨年大潟村の農家の87%がこの基金に申請し、村の水稲作付面積の75%に上る約7500haでさまざまな農法が行われた。これがどのように広がるか、大いに期待したい。

こうして八郎湖の内外で水田濁水を減らす新たな取り組みが始まった。農家1人1人の取り組みは目に見えないが、それが何百、何千と増えることによって八郎湖の水がきれいになる。

大潟村のある農家は「八郎湖は広大だが、元をたどれば1滴の雫だ。その1滴1滴を自分たちが変えていけばきっとよくなっていく」と語っている。「1滴を変える」農家の努力に注目し、応援していきたい。